

法華経——内なる海のごとく深き教え

ロケツシュ・チャンドラ

朝鮮——その名には「朝なぎの国」の意味があります。千六百年前に仏教が到来したとき、この国は自らの存在の意味を見出し、そして永遠を見出しました。仏教はこの地に新たな意義をもたらし、それによって韓・朝鮮半島の文明が花開きました。やってきたばかりの仏教の活力や新鮮さは、国を功德で満たし、芸術を育み、教育を広め、道を造り、憩いの場を設け、善行を奨め、幾千もの多様なかたちで安らぎを増幅させていきました。尊貴なるものへの熱願と道義に支えられた人間らしいシステムが生まれ、そこから、深みの

ある社会・文化秩序が生き生きとした具体的なものとなってきたのです。この国の文明は、仏教のもとに絶頂を迎えたのです。ある偉大な詩人の句が思い起こされます。

——夏草や兵どもが夢の跡⁽¹⁾

私たちは今、極度のストレスとどまることを知らない消費主義の時代を生きており、平安と自制を必要としています。それを与えてくれるのは、仏教だけなのです。こうあります。「外部の存在の姿かたちに執われなければそれが禪であり、自己の内面において、心



ソウルでの法華経展の開幕式には各界から来賓約2500人が出席。ロケッシュ・チャンドラ博士（中央）、李壽成・韓国元首相（同展実行委員長）、慶南大学の朴在圭総長、韓国宗教学会の金在榮会長らがテープカットを行った（2016年9月21日、池田記念講堂前で）

が乱れないのが定である。それを禪定というのである」⁽²⁾

韓半島に仏教がもたらした光

仏教は、この国の言葉の発展に寄与してきました。自国語の文法上の必要に応える表記法を与えたのです。七世紀後半、薛聡^{ソルチヨン}が吏読^{イドゥ}文字をまとめ、漢文を書いた紙の余白に格語尾を付けるようになりました。これは、読み手が漢文の体系を自国語化する手助けになりました。薛聡は、まず八つの格語尾すなわち主格、対格、具格、与格、奪格、属格、位格、呼格の変化語尾を成立させます〔格語尾分類には諸説ある〕。彼は、サンスクリットの八つの格語尾を基に、これらの変化語尾を定めました。彼の父親は優れた仏教学者であったため、父親から影響を受けたに違いありません。一〇七五年に書かれた『均如伝』^{キジュチン}（大華嚴首座円通両重大師均如伝）には「吏読の語尾変化は、サンスクリットに類似している」とあります。⁽³⁾一四四六年には、聖君世宗^{セジョン}が新しい文字とその印刷用活字〔銅活字〕を創製しました。この文字はハングルつまり「偉大なる文字」として現在も使わ

れています。ケイ・ウォンチュン (Kai Won Chung) 博士は、プリンストン大学に提出した論文で、ハンゲルはサンスクリットの文字の規則に沿って構成されていると述べています。この新しい文字が、この半島の人々の知的創造力に深い影響を与えてきたのです。

この国の最も偉大な詩人のひとりであり、愛国の僧侶として独立運動で大きな役割を果たした韓龍雲 (ハンヨ龙湾) (二八七九—一九四四年) は、仏教徒の永遠性と超越性という透明な静寂の中に光明を求め、このように詠いました。

花もない大木の 苔古^{ふる}りた肌のあたりに 灰^{はい}かに
こもるえいはれぬ香り——、あれは誰の息吹きで
せう。

源を知る人もない遠い山あひから流れては 河床
の小石^{まづ}轉ばすせ、らぎの音——、あれは誰の歌聲
でせう。

蓮^{はちす}の踵^{かゝと}で漕^はしない海を踏み 紅玉^{こうぎよく}の掌で西空を撫
でさする落日の粧^{とほあかね}ひ 遠茜——、あれは誰の詩な
のでせう。⁽⁴⁾

インド・アヨーディヤ (阿踰陀) 国の王女は、嫁ぎ先となったこの新たな祖国の国民性の形成に深い影響を与えました。伽耶国の首露王^{スロワ} (金首露王、一—二世紀) は中国の政治的世界観をよく知っていました。というのも、韓半島は海に妨げられることなく陸路で中国とつながり、絶えず中国の政策と関わり続けてきたからです。⁽⁵⁾ (だからこそ) この半島は自らのアイデンティティを護らねばなりませんでした。それを堅固にすべく、首露王は、インド第一の王統であるイクシユヴァーク王家のアヨーディヤ⁽⁵⁾ 国の王女を求めたのです。この王家の出身者で最も有名なのはラーマ王子 (叙事詩『ラーマヤナ』の主人公) です。アシユヴァゴーシャ (馬鳴、八〇—一五〇年頃) は『ブッダ・チャリタ (佛所行讃)』第一品で、釈尊の父シユッドーダナ (浄飯王) がイクシユヴァーク王家の末裔であり、その力は (同王統の初代王である) イクシユヴァーク王のように無敵であったと記しています。⁽⁵⁾ 釈尊の父親と釈尊自身がイクシユヴァーク王統に属していたのですから、首露王がアヨーディヤ⁽⁵⁾ から王妃を迎えることは、当時の政治認識と一致

していたと言えます。半島諸国がいかにインドと絶えず関係をもちとしたか、その史書から読み取れます。

『三國遺事』には、国家を統一した新羅の王たちはクシヤトリヤ（インドにおける王族・武人階級）だと記されています。⁽⁶⁾ また、中国からインドへ巡礼した義浄（六三五

―七一三年）は、「高麗国」（高句麗の別名）のサンスクリット名が矩矩吒訶説羅であると述べています。⁽⁷⁾ 亀茲国の利言（七〇六―七八九年頃）も、彼の漢梵対訳字書（『梵語雜名』）に、同国のサンスクリット名を記載しています。⁽⁸⁾

韓半島最初の仏教僧院である仏国寺は、法華経の見宝塔品になぞらえて造られました。その多宝塔は多宝如来の塔であり、釈迦塔は釈尊の塔です。これらの石塔は、石工阿斯達ルによって造られました。阿斯達は若い妻（阿斯女）に「石塔が完成したら、すぐに戻る」と約束して家を出ました。しかし、夫から何年も連絡がないため、妻は夫のいる仏国寺を訪れます。「しかし会わせてもらえず、僧侶から」「石塔が完成すれば」池に塔の影が映るので、それまで池のそばで待つように」と言

われました。むなしく待ち続けた妻は、ついに池に飛び込み、死んでしまったといわれています。以来、その石塔（釈迦塔）は無影塔とも呼ばれています。すべてのものはむなしく、しかし心は何ものにも妨げられません。存在は朝露や泡沫のごとく儚く、しかし、「心魂を込めた」塔は今もそこにあります。不朽の仏国寺の存在とともに、法華経は法眼の光となり、春の歌となりました。仏国寺は、当時のこの国（新羅）をまさに仏国土とした僧院なのです。

印・韓・日の文化の合流

仏教は、韓半島から日本に伝来しました。五五二年、百済の王（聖王／聖明王）が日本の欽明天皇に仏像を贈ったとされています。仏教の理法とともに、世俗の諸技術、仏教建築や彫工の匠、僧侶らが日本に入ってきました。また、用明天皇（在位五八六―五八七年）の病氣平癒を願って、韓半島の王が金銅の薬師如来像を贈ったともいいます。用明天皇が崩御した後、短期間でしたが、「崇仏派の蘇我氏と排仏派の物部氏による」激し

い合戦が起りました。用明天皇の皇子であつた聖徳太子は、合戦に勝利した暁には「(仏教を守護する)四天王を祀る寺院を建立すると誓願を立てました。この合戦は、聖徳太子が支持した崇仏派の蘇我氏の勝利に終わります。こうして、平和と高德の宗教が政治面、社会面、精神面と広範囲にわたる進歩に寄与しました。「聖徳」には「最高の徳の力」という意味があります。聖徳太子は、韓半島から伝わったものすべてを発展させていきました。

韓半島を訪れたインド人最後のアーチャーリヤ(阿闍梨／高僧)は、指空(チコシ)師でした。彼は一三四〇年代に高麗に入り、インドのアランタ寺(阿羅難陀寺)を模して檜厳寺(フエナムサ)を建立しました。今回、私は「Perfume of Grasses (草の香り)」というレストランで「甘草茶(カムチヤカ)」をいただけたことに驚き、喜びました。このお茶は指空師にまで遡るものだからです。指空師の弟子無学は、朝鮮王朝(李氏朝鮮)を建国した国王(李成桂、在位一三九二―一三九八年)に対し、首都を開城(ケソン)から漢陽(現在のソウル)へ遷すよう提案しました。知られ

ている指空師の功績で日本に残る唯一のものは、諸病を治癒させるマントラ(真言)を伝えたことです。その際、病氣は悪魔の姿で描写されていました。

インド、韓半島、日本の歴史的・文化的合流は、今再び、法華経の言の葉の葉音に包まれて、私たちの心の奥底で花盛りの時を迎えています。それは、偉大な師・池田大作先生(SGI(創価学会インタナショナル)会長、東洋哲学研究所創立者)が私たちに法華経の崇高な価値を示してくださっているからです。すなわち、法華経は、生命の廣大無辺の広がりを示しつつ、人間を聖なる存在へと超越させゆく教えなのです。法華経は、私たちの内なる仏性を開花させながら、今、新たな輝きを放っているのです。

法華経の三つの宝

法華経について三つの宝があります。それは鳩摩羅什、日蓮大聖人、池田大作先生であります。鳩摩羅什は法華経を創造的に漢訳し、大聖人は法華経を生命そのものの革新・蘇生として解釈されました。そして池

田先生は法華経を、高貴なるすべてのものの調和をもたらし、自然と人間とのハーモニーをもたらすための新たな火花とされました。「創価」という言葉そのものが「価値創造」を、すなわち「生きることの美の刷新」「社会関係の刷新」「自然に対する人間の心配りの刷新」を重ね続けていくことを意味しています。創価学会は、渡り鳥のごとく飛翔し、地球のあちこちに翼をたたみます。それは、メンバー一人ひとりの人生をより偉大なものにするためであり、池田先生の比類なき言葉「人間革命」に内実を与えていくためです。池田先生は、機関誌『グラフSGI』で毎号、内なる人格と外界の調和を共に実現しようと、私たちを鼓舞してください。たとえば――。

さあ 未到の希望の千年へ
共に 勇んで出発しよう！

……

高く また高く
仏法の 人間主義の旗を掲げて！⁽⁹⁾

創価学会は、ドグマも戒律もなく、それでいて、すべての人間の心に眠る内なる可能性を呼び覚ます現代世界で唯一の団体です。この内なる光明とは、私たちの心の大きく開かれた扉であり、それは常に新しくなり続けているのです。カシミールの偉大な詩人・哲学者であるアビナヴァグプタ〔九五〇―一〇一六年頃〕の言葉にこうあります。

彼（クリシュナ）は、この山（ライヴァタカ山）を幾度となく見てきた。

しかし今、初めて見たかのような驚きでいっぱいになった。

毎瞬毎瞬、新しくなっていくこと、

それこそが美しきものすべての本質なのだ。⁽¹⁰⁾

池田先生は法華経を、人々の人生への祝福とされました。それは、ドグマの厳酷さに縛られず、数々の価値にあふれる人生です。それは「行動の道」であり、

隣人への理解を深め、調和の社会を築く人生であり、幸せに生き、他者を救済する幸せをかみしめる人生であり、奉仕と利他的分かち合いという新たな生き方への光明となる人生であり、法華経の春風に包まれる平和な世界のために貢献していく人生です。そして、菩提樹の葉が太陽の光とぬくもりなしには、また大海から生まれる雨なしには存在できないのと同じように、人間の「価値の道」もまた「太陽と慈雨のごとく」、行き過ぎた物質主義とテクノスフィア（技術圏）を和らげ、穏やかなものに変えていかなければならないのです。

仏教は、人間中心のアプローチをとる点で、神を中心とした他の宗教体系と区別されます。過激主義などの暴力噴出の炎に焼かれた現代の状況にあって、緊急に必要なのは、平凡な庶民の願いを中心にしたビジョンです。そして、池田先生はヘッセの言葉を引いて「君が求めている光は／君自身の中に宿っているのだ」と教えておられます。⁽¹¹⁾人類は、貪欲や搾取から離れねばなりません。法華経は今、時になつて、人類の上に降る慈雨であります。生命の尊厳と力が降り注ぐので

す。創価学会とはすなわち「人間革命」のことであり、それは「宇宙は生命である」ことを、そして「生命は創造的である」ことを意味しています。創価学会が示す人間の価値には万人に通じる普遍性があります。「普遍的」という語の真義になったものであり、いかなる原理主義とも無縁であります。

池田先生は自ら献身的に行動する巡礼者です。この詩の通りに――。

光 もとめて

われ 進みゆく

心の 暗雲をはらわんと

嵐に動かぬ大樹を求めて⁽¹²⁾

世界の約二百カ国・地域が、法華経の清らかさに目覚めています。世界中の幾百万という人々が奮い立って、個人レベルでは自己向上の人生を生き、社会との関わりにおいては他者を助け、すべての動植物を護り、無生物界を保全し、行き過ぎたグローバリズムや新帝

「生きとし生けるものへの慈悲」を世界へ

法華経の「一乗」の教えに含まれる内なる悟りは、現代では次のように表現できるでしょう。

国主義によって世界が燃え尽きてしまわぬよう平和を確かなものにし、テクノスフィアの拡大に目を光らせています。池田先生が毎年発表される平和提言「『SGIの日』(一月二十六日)記念提言」は、我執を捨て、万物に対して共感する新しき世界から響いてくる気高き声であります。平和提言では、自然を生きている存在として見つめ、生命の無限の可能性を未来に現実化できるよう働きかけ、醜き軍国主義が台頭しないように訴えておられます。池田先生は、あらゆるものが成長し発達していくための心の大地を与えておられるのです。

創価学会の幾百万という実践者が抱く決意はまさに、あまたの宝玉が互いに輝きを映し合う因陀羅網いんだらもうのようです。「そのおかげで」私たちは、飾り気のない、清らかなで、広々とした雰囲気きずなの社会のなかを歩み、豊饒な自然のなかを歩んでいくのです。創価学会は、人類の不安や関心を深き価値観へと昇華するために、世界で率先して行動している一大組織であります。

- ① 内なる人格と外界は相互に関係している。
- ② 価値は、生身の肉体をもった人間が基軸である。
- ③ 価値は、生きた個人の具体的体験を通して現実化される。

- ④ 人間と環境は相互に作用する。
- ⑤ 人間とは、完成へと向かう「永遠の美」の似姿である。

- ⑥ 価値は閉じた拳ではなく、開いた掌である。
- ⑦ 宇宙は智慧と慈悲を体現している。
- ⑧ 人生の省察と「その結果つかった」意義は、泥池から汚れなく生じる清らかな白蓮である。
- ⑨ 池田先生自身が、釈尊からの偉大なメッセージである。世界中を旅して、全民衆の利益と幸福のために働いておられる。

- ⑩ 釈尊は涅槃の前に、最後にヴァイシャーリーの

地を目にして、「人間の生命いのちは甘美なものだ」⁽¹³⁾と述べた。この言葉と池田先生の思想は響き合う。

池田先生の賢者の声から流れ出る智慧の宝玉の数々は、今日の私たちの生のリズムに働きかけ、感化を及ぼしています。池田先生は、「常楽我淨の四徳のうち」「我」の徳を広める上行菩薩の行動の中に「それに続く」自身の使命を見出されました。題目は私たちの精神的活力を奮い立たせます。日蓮大聖人は国土の安穩のために正法を打ち立てるべく、『立正安国論』^{した}を認められました。人の心を鼓舞する大聖人の数々の金言は、甚深なる「信」の一点に集約されていきます。信は唱題の実践から起こりますが、題目には次の三つが「三即一」として込められています。すなわち①宇宙的仏としての釈尊②真理の蓮華③一切衆生を成仏へと導き、三界の一切衆生を幸福に導く行動であります。成仏とは、いかなる環境にあらうと歓喜に満ちた価値ある人生を生きることです。池田先生の言葉で申し上げれば、それは「生への選択」⁽¹⁴⁾です。池田先生は、私たちの感情と知性を蓮の清らかさへと変えてくださいます。池田

先生は、頑強で健やかな「菩提樹」を育てようと、尊貴なる種子をまいてくださいます。それは、法華經の崇高な道を歩む人々の行動のなかに「菩提（悟り）」の流れが絶えず続いていくためです。

私にとって、法華經とは、創価学会とは、池田先生とは、私たちの内なる大草原であり、そこを旅して私たちは人に尽くすことの本質に近づいていくのです。それらは多くの価値に光を当てて、私たちがつまらない凡俗な人間になる悲劇から救ってくれます。それらは、私たちを生き生きとさせてくれる触媒であり、私たちを超えたかなたから、そして私たちの内側から聞こえてくる現実の声であります。

創価学会は、文化的相互作用によって形成されています。そこでは文化への駆動力や心を込めた価値ある仕事、覇権、グローバルズムなどの反動的な思想によって脅かされることはありません。人類社会の行き過ぎた合理主義、消費主義、ニヒリズムは、内的・精神的バイタリティーへと、そしてバイオスフィア（生物圏）の拡大へと変換されねばなりません。マハトマ・ガ

ンジの言葉を借りれば、世界は「快樂の地ではなく、責任の地」でなければならないのです。⁽¹⁵⁾ 池田先生のメッセージは、内的生命の価値によって精神を真に充足させ、物質的富へのとどまることなき追求という酸性雨を和らげてくださいます。世界中に多くの組織をもつ創価学会は、人類の生活に安定を取り戻しています。それによって自由と公正が両立できるようになり、宗教教義の多元性や実在の多様性に敬意が払われるようになるのです。創価学会が示すのは、すべての生命の聖性であり、自然の尊厳であり、覚醒への自覚です。そうやって、生命の浜辺に集う小石たちが素晴らしい真珠になっていくようにしているのです。創価学会には、法華経が結びつけた多様で豊かな渚があります。そう、法華経は我らが内なる「意識の大海」なのです。池田先生にとって、地球上の民衆は釈尊の大切な仏子であります。月は穏やかな水面にこそ映るように、仏は私たちの平穏な心に現れてこられます。題目を唱えることで、私たちの内なる仏性が呼び出されます。人は「我慢無明の旗」を降ろし「偏執の杖」を捨てて、⁽¹⁶⁾

南無妙法蓮華経と唱えねばなりません。仏のすべての果徳は題目の五字に込められています。私たちがそれを信受するならば、仏の果徳を受け取るのです。まっすぐ伸びない樹も、剪定すれば、まっすぐ生長します。そのように、題目を唱えれば、久遠の仏の生命が我が身に入ってこれ「自己の仏性が伸び」るのです。法が正しく理解されず、正しく信じられなければ、世間は無秩序になっていきます。「仏法は体のごとし世間はかげのごとし体曲れば影ななめなり」⁽¹⁷⁾です。植物の生長には、土が不可欠です。題目は、そこから「創価」という価値の世界が開花する大地なのです。太陽が花を咲かせるように、題目が心を開花させるのです。「このようにして得られた」精神的価値が、人生に美しさと彩りと香りをもたらします。

池田先生による法華経の解釈は、覆い隠されてきた「心の深奥部」を明らかにします。「法」は体観するものであり、理性の光で照らされたとき、現実に生かされることとなります。一方、理性は体観によって支えられねばなりません。科学は「法」の領域に押し入る

ことはできないのです。

「平和であるとは」互いに何の恐怖も与え合うことなく、心から信頼し合い、愛し合っている状態のこと」⁽¹⁸⁾

——そのような平和が当たり前の状態にならねばなりません。そうなってこそ、私たちは真に人間らしい社会、悲惨の二字のない社会を築いていけるのです。この目覚めは、万人にとって本然のものです。法華経は、生きとし生けるものへの慈悲の行動の道を歩むよう教えます。大乘仏教は、欲望の消滅を唱えるのではなく、貪欲を利他的な願望へと転換するよう説いています。池田先生は、生命の尊厳以上の価値はないと言われています。池田先生は見事に洞察されています。

生命が他にかげがえない尊厳なものであるという意識は、人間が高度な意識能力をもつ存在となった当初から、すでにあつたと思うのです。ところが、現実のうえでは常に互いに憎しみ合い、傷つけ合う、醜い生命の葛藤の歴史を歩んできました。詮ずるところ、自己の生命の働きを、人々を

傷つけるような醜いものではなく、すべての他の生命を慈しむ、美しいものにするることによって、事実のうえで人間生命を尊厳ならしめる以外にな⁽¹⁹⁾いと考えます。

池田先生は、絡み合った非情の網を破り捨て、その代わりに、価値の花開く世界を織り上げようと呼びかけておられます。人間性中心の天地となるよう、端座して題目を唱え観心しゆくとき、争いや不和の境界も新境地に向かって開放されていくはずです。「そのような」新天地へと今を超えていくことが、人類の伝統であり、責務でもあるのです。池田先生は、新たなビジョンで私たちを高めてくださいます。そして「私たちがなすべきことは、日本の古歌にいう」「いかでこの心のちり（塵）をはら（払）はまし」——まさに、このこと「心の浄化」なのです。

邦訳に際して見出しを入れた。（一）内は補注

訳注

- (1) 芭蕉の句の次の英訳が引かれている。“Ah! the grass and the wind! / And here among these stones / The shadow of a dream.” (おおー 草よ、風よー／これらの石たちの中にただよう／夢の影よ)
- (2) 中国禅宗第六祖・慧能の言葉。佐藤悦成「研究ノート『敦煌新本 六祖壇経』試訳」『禅研究所紀要』第二十三号、一九九頁
- (3) 『均如伝』には「唐文如帝網交羅、我邦易説。郷札似梵書連布、彼土難諳。」(唐の文は、帝網の交羅するがごとく、我が邦にては読みやすし。郷札は梵書の連ね布くに似て、彼土にては諳ること難し)とあり、郷札つまり自国語で書かれた文章がサンسكريットのつながり方に似ていると説明されている(金文京『漢文と東アジア——訓読の文化圏』岩波書店、二〇一〇年、一三三—一三四頁。傍線は訳者による、以下同様。
- (4) 韓龍雲「桐の葉」『朝鮮詩集』金素雲(訳編)、岩波書店、一九八八年、一六一—一七頁
- (5) 馬鳴『佛所行讃』巻第一の生品第一。「甘蔗之苗裔 釋迦無勝王 淨財徳純備 故名曰淨飯 群生樂瞻仰 猶如初生月」(大正大藏経第四卷、一頁上)。甘蔗にはイクシユヴァーク朝という意味もある。
- (6) 『三國遺事』巻三の皇龍寺九層塔。「慈藏法師西學。乃於五臺感文殊授法……文殊又云。汝國王是天竺刹利種。王預受佛記。故別有因縁。不同東夷共工之族」(大正大藏経第四九卷、九九〇頁下)。天竺刹利種はインドのクシャトリヤを指す。
- (7) 義浄『大唐西域求法高僧傳』巻上。「梵云矩吒訶説羅。矩吒訶是雞。訶説羅是貴。即高麗國也」(大正大藏経第五一卷、二頁中)
- (8) 『梵語雜名』には、「高麗^{モッリ}」と表記されている(大正大藏経第五四卷、一二三六頁上)。
- (9) 詩「永遠の平和へ人間主義の旗高く」『グラフSGI』一月号、二〇〇一年、二頁
- (10) 九世紀カシミールの詩人・アーナンダヴァルダナの詩論「暗示の解明 (Dhyanāloka)」に対するアヴィナヴァグプタの註釈から。Wader, A. K. *Indian Kavya Literature Vol.4* (Delhi: Motilal Banarsidass Publishers, 1983/1994) を参照。
- (11) 『法華経の智慧』第一巻、聖教新聞社刊、一九九九年、二七頁。ヘッセの引用は、三浦鞆郎(訳編)『生きることについて ヘッセの言葉』社会思想社より。
- (12) 小説『人間革命』第二巻「地涌」の章
- (13) 中村元『中村元選集(決定版)』第12巻 ゴータマ・ブツダⅡ 原始仏教Ⅱ 春秋社、一九九二年、一九九頁
- (14) A・J・トインビー博士との対談集の英語版書名が *Chose Life* である。
- (15) ガンジーは、「インドを責任の地 (karmabhumi) と思わないか」との投書に対して、「本来インドは責任の地であり、快樂の地 (bhogbhumi) と区別される」と

- 回答している。『The Collected Works of Mahatma Gandhi Vol.30 (New Delhi: Publications Division, Government of India, 1999), pp. 173-175. (Electronic Book)』
- (16) 創価学会版『日蓮大聖人御書全集』に「慢のはたほこ(幢)をたを(倒)し^{いか}忿りの杖をすてて」(四六三頁)とある。
- (17) 『日蓮大聖人御書全集』九九二頁
- (18) A・J・トインビーとの対談集『二十一世紀への対話』、聖教新聞社刊『池田大作全集』第三巻、三八三頁
- (19) 前掲『二十一世紀への対話』、『池田大作全集』第三巻、六四七頁

Lokesh Chandra / インド文化国際アカデミー (International Academy of Indian Culture) 理事長。インド文化評議会 (ICCR) 会長。仏教とヴェーダ、インド美術研究で名高い。1927年生まれ。サンスクリット、パリー語等、20以上の言語に通じ、仏教に関する著書が400冊以上ある。主著にアジアの仏教・芸術・文学・歴史の文献を集めた『シャタピタカ(百の法蔵)』シリーズがある。インド上院議員、インド歴史学研究協議会 (ICHR) 副会長も務めた。2006年、「パドマ・ブリーシャン勲章」が贈られた。